法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-11

〈追悼文〉 畏友中本正智君のこと

下地，良男

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言 / 琉球の方言
(巻 / Volume)
18-19
(開始ページ / Start Page)
46
(終了ページ / End Page)
47
(発行年 / Year)
1995-02-24

Hosei University Repository

畏友中本正智君のこと

下　地　良　男

首里崎山町高台の御茶屋御殿跡にカトリック教会があって、その一角に貧しい琉大生のための学生寮があった。私も親の仕送りだけではとてもやって行けず、もう満杯だというのを無理にお願いして入寮し、お世話になることになった。家賃がタダというのが何よりも魅力だったが、英文科に入った私にはアメリカ人の神父たちと英会話の機会がふんだんに持てるのではないかとの期待があった。しかし、この期待はモノの見事に外れた。というのも、言葉の習得にかける神父たちの熱意は大変なもので、文字通りガツガツと日本語で話しかけてこられたからである。

ずっと後で増築され、また、食事もここでとれるようにはなったが、それまでは琉大男子寮の食堂で三度三度の食事はとった。毎日ひもじい思いをしながらの学生生活であったが、崎山の御茶屋御殿から男子寮までの往復約2キロの道のりをテクテクと歩いて通ったものだ。

男子寮の食堂は夕方は6時半まで開いていたが、その時もし残り物が出ればタダで放出したので、時間を見計らって出掛けて行ってよく恩恵に与かったものだ。我々はそれを残飯拾いといって自嘲したが、背に腹はかえられなかった。

午後十時を過ぎると、空腹に耐えかねてよく近くの小さなパン工場に行き、食パンの切れ端を買って来て空腹を満たすこともあった。中本正智君とはそんな生活を2年半ばかり共にした訳である。

彼は当時から学者の卵として我々から一目置かれていたが、カバンに調査ノートをびっしり詰めて、疲れた足取りで方言調査から帰るということが度々であった。調査のため全島を隈なく歩き回っている様子だった。

ところで、我々はよくそろって銭湯にも行ったのだが、その行き帰りに時々出合うちょっと気になる女子学生がいた。ある日、私は勇を鼓してその人の名前や出身地やらを聞き出し、中本君に話したことがあった。

中本君もまた日頃から彼女に関心があったのであろう。彼は方言調査のついでにわざわざ彼女の実家を訪ね、しっかり身元調査までして来たのである。その日は日曜日で、その人も郷里に帰っていたらしいのだが、縁側で両親や彼女を前に「あれは何というか」「これは何というか」と聞き出す合間合間には家族構成だとか、家庭環境のことまでちゃんと調べ上げていたのである。

ある年の旧正月、奥武島の彼の家に皆で押しかけ、「正月をした」ことも今は懐かしい思

Hosei University Repository

い出である。あの頃の交通機関はバスだけだったから、１泊２日の行程で奥武島まで行ったのだった。われわれは彼の兄さんと親戚の人が出してくれたサバニ２艘に分乗して沖合まで行って釣糸を垂れたのだが、冬の海はかなりしけていて、私はそのうち気分が悪くなり、ダウンしたことを覚えている。

その日の料理は皆で釣り上げた魚を彼のお母さんが捌いてつくったものだった。正智の友達だというので心から歓待して頂いたのだった。酒がまわり、三味線が鳴り響き、やがて替わりばんこにカチャーシを舞い、夜が更けていった。1960年の旧正月のことで、その３月には我々は晴れて大学を卒業することができたのだった。

私は大学入学の頃から漠然とアメリカへの留学を夢見ていたが、幸いにも四年次在学中に米留試験に合格することができた。「米留」というのは、琉球米国民政府が米国陸軍の委託を受けて実施していた米国留学制度のことで、毎年４、50名の若者たちがその恩恵に浴していた。

私は専攻を英語教授法としてあったのだが、当時英文科卒業生の留学時の専攻は英米文学でなければ英語教授法をやるのが習わしだったからである。それは漠然とした選択だった。ところが、帰ってきた人たちの話を聞くと、向こうの大学院では英語教授法といっても半分は言語学をやらされるというのだ。これは困ったことになったと思った。我々が教えを受けた当時の英文科の先生方は戦前の文検で資格を取られた方々が大半で、それで、私はフォーニームの何たるかも知らない状態だったのである。

そこで、中本君にお願いして、フォーニームについていろいろ講義してもらったのだった。しかし、言語学におけるもっとも重要なこの概念がそう簡単に理解できるはずがない。分かったような、分からないようなそんな心境だった。そういう状態で渡米したのであるから、留学中味わった苦労は並大抵ではなかった。

しかし、１年もすると、何とか講義にもついて行けるかなというところまできた。そんなとき、中本君から服部四郎先生の『言語学の方法』と琉球方言を特集した『国語学』誌が送られてきた。毎日英語の海に囲まれ、日本語にものすごく飢えていた時期だったので、この贈り物は本当に有難く、むさぼるように読んだものである。

あれから、33年。そして、あの御茶屋御殿の時代からも既に34、５年の歳月が流れている。中本君はその間われわれの期待した通りに日本を代表する言語学者の１人として大成された。そして、これからさらに大きな活躍を期待されていた矢先に、残念ながら病に倒れ、ついに帰らぬ人となった。その顔は眠るが如く、穏やかなものであったという。

彼の元気な頃の笑顔と温顔が瞼に浮かぶようである。彼は沖縄の持つ優しさと純朴さをいつまでも失わなかったすぐれた学者だった。今は、ただ、静かにご冥福をお祈りするばかりである。

（琉球大学教授）